

大学教員のプレゼンテーションスライドの質向上とは —デザインとの関係に着目して—

大岩 俊之

はじめに

1998年に大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について」の中で、それぞれの大学等の理念・目標や教育内容・方法についての組織的な研究・研修（ファカルティ・ディベロップメント¹⁾）の実施に努めるものとする旨を大学設置基準において明確にすることが必要と明記された。2000年6月、文部科学省内に設置された「大学における学生生活の充実に関する調査研究会」は、「大学における学生生活の充実方策について（報告）—学生の立場に立った大学づくりを目指して—」（廣中レポート）を取りまとめた。教職員の意識改革と活用の中で、教員の意識改革として、教員は研究者としての能力について評価され、その教育能力や教育実績は軽視される傾向が強かった。そのためか、正課外の教育活動への参加や学生の相談に対する対応を含めた学生に対する指導については、ほとんど評価されていないとの指摘をされた。

現在、大学において教員相互の授業参観や授業評価、授業改善のためのワークショップや授業検討会などが行われている。大学授業の改善、ファカルティ・ディベロップメント（以下、FDとする）を考える時に、最初に行われるのが学生による評価アンケートであり、授業アンケートは多くの大学で行われている（村上 2012）。

文部科学省（2023）では、令和3年度の大学における教育内容等の改革状況についての調査結果が報告されている。その中にある、「令和3年度の大学における教育内容等の改革状況について（概要）」では、2022年10月～2023年1月に実施され、調査対象となった国公立793大学（回答率98%）のデータが掲載されている。主な項目として「1.学位授与の方針等の策定と公表の状況」「2.教育内容の改善の状況」「3.教育方法の改善の状況」「4.開かれた大学づくり」「5.教職員の資質向上等の取組状況」「6.組織運営の活性化」「7.グローバル人材育成と大学の国際化の状況」の7つである。FD「5.教職員の資質向上等の取組状況」の実施状況について、「教員相互の授業参観」は334大学（43%）、「教員相互の授業評価」は119大学（15%）、「教育方法改善のためのワークショップまたは授業検討会」については436大学（56%）で実施と、FDの目的である「教員の資質向上」にむけた取り組みとしては物足りないともいえる。教職員の資質向上については文部科学省の調査項目にもあるように重要な課題ではあるものの、積極的に推進されていないともいえる状況について、佐藤（2023）は、大学教員が自らの質について論じることは自己批判を伴い、その困難さと面倒さゆえ避けられてきたか、大学教員は自らの「能力に対する信頼」がこれまで同様に社会から得られていると認識しているため問題としてこなかったのかもしれないと述べているように、教員自身の保身や過信が背景にあるともいえよう。

一方で、シラバス作成にあたり、内容を担当教員以外が検討・修正する機会を設定する大学数は、

674 大学 (90%)、能動的学習 (アクティブラーニング²⁾) を取り入れた授業を実際に行っている大学数は、729 大学 (97%) と、教育内容の改善は進んでいる。

小学校や中学校などの初等中等教育段階の学校については、学習指導要領によって基準が定められているが、高等教育段階の大学においては、それぞれの大学が、自ら掲げる教育理念・目的に基づき、自主的・自律的に編成することとされている (文部科学省 2009 年以前)。大学は、学問の自由という考え方に基づいており、カリキュラムをどのように編成するのかなど、大学の構成員が決定することができる (夏目ほか 2010)。各教員が作成するシラバスは大学のディプロマ・ポリシーに基づき各々が自身で決定することができ、学内ではそのシラバスについて教務委員会等で審議をした上で決定となるが、授業手法については各教員に任せられている。そのため、教員が使う資料やプレゼンテーション (以下、プレゼンとする) のスライドは、各教員が個々に工夫しており人によってデザインは異なる。

2020 年、新型コロナウイルスのパンデミックにより対面授業の中止を余儀なくされ、オンライン授業を展開することになったことは、史上最大の FD をもたらした (佐藤 2023)。この時期、オンライン授業やハイブリッド授業が当たり前になったことにより、プレゼンのスライドを活用するケースが一気に増えた。そのため、教員ごとの自由裁量で展開されるスライドの差異が見られるようになり、それが学生からの授業評価に影響するようになった。

これらのことから、プレゼンのスライドの重要性を考慮し、プレゼンのスキルではなく、スライドに焦点を当てた。本稿では研究者が授業や学会発表者向けに執筆したプレゼンスライドに関連する書籍に加え、企画提案、社内会議用に執筆されたビジネス向けの書籍を加え比較することで、スライド作成にあたり求められている要素は何なのかを解明することが、大学教員の質を高め、授業の満足度が上がる。ひいてはそれが学生の満足度を上げることにつながるのではないかと考える。

1. プレゼンスライドに関する先行研究や FD の状況について

大学生は教員が作成するスライドをどのように捉えているのだろうか。山下ほか (2010) によってプレゼンスキルと分かりやすさについて口頭、資料、動作、内容の 4 点から分析されている。分かりやすさの要因のうち「資料」と「内容」が共に 47.6% で、全体の 95.2% を占めている。「資料」のうち、「絵・図・表・写真」の使用が 55.0%、「スライドのレイアウト」が 32.5%、「資料の情報量」が 12.5% であり、このことからスライドのレイアウトを意識する点や、図・表などを使用することが重要だと分かる。一方の分かりにくさの要因となる点は、「資料」が 28.6%、「内容」が 55.4% で全体の 84.0% を占めている。「内容」がもっとも重要であることは当然だが、「資料」も分かりやすさを左右する重要な要因の一つである。「資料」のうち、「スライドのレイアウト」が 68.8%、「絵・図・表・写真」の使用が 18.8%、「資料の情報量」が 12.5% であった。このことから「資料」が分かりにくい場合は「スライドのレイアウト」である可能性が高く「資料」の中のスライドの出来栄は、分かりやすさ、分かりにくさに直接影響すると言えるだろう。

スライドに言及している FD の状況も見ておきたい。大同大学 2022 年度 FD 講演会は、「見やす

い講義スライドや資料の作成」とのテーマで開催された。対面以外の方法で授業運営をおこなう機会が増え、対面授業の際には問題になりにくかった「資料の見辛さ」が、教育の品質や受講者の学習意欲を低下させることが懸念されるとの趣旨で行われている。同大学では FD 活動の一環として授業研究、授業研究会に取り組んでいるが、「講義資料の見やすさ」は度々熱心に議論されるテーマになっており、講義スライドの重要度がうかがえる。

また、駒澤大学令和 4 年度 FD 活動報告書（2022）に、「公開授業実施結果」報告が記載されている。4.公開授業、令和 4 年度「公開授業実施結果」報告の中の「7.こうすればさらによくなると思った点」には、「スライドの文字がもう少し大きい方がよい」「パワーポイントのスライドのレイアウトがやや単調な印象を受けたので、視聴者にビジュアル的にアピールできる工夫があれば、より完成度が高い授業になる」「一部のスライドの文字が小さかったので、部分的に拡大する等、見せ方の工夫が必要」など、スライドに対する言及が目立った。

大学によって FD の取り組み方は様々であるものの、これらの報告を見るとプレゼンのスライドが見やすいか否かは、大学側が考える重要なポイントであると言えよう。

2. 講義法における一般的な授業の教材

授業を行うとき、口頭での説明に加え、学生への知識の定着や理解を促すために、教材が使われる。教材には、それぞれ強みと弱みが存在する。ここでは佐藤（2017）を参考に、大学の講義法でよく使われる、「教科書」「配布資料」「板書」「スライド」4 点のメリット、デメリットを比較する。

(1) 教科書による方法

高等教育では、小学校や中学校などの初等中等教育と異なり、教科書は授業を担当する教員が決めることが多い。事前に予習をさせるときにも便利である。教員の説明が足りないときにも、教科書を使って補足ができる一方で、教科書を使用すると、ただ読み上げるだけの授業にもなりがちであるため、板書と組み合わせるなどの工夫が必要である。

(2) 配布資料による方法

スライドと併用する場合、そのままスライドを A4 用紙に 2~4 スライドを印刷して配布資料に使うこともできる。ただ、配布資料は、事前の印刷や配布時間が必要となり、手間がかかる。スライドを印刷した配布資料は便利であるが、授業の最初に配布すると、顔が下に向きやすい。授業後に配布したり、後からダウンロードできるようにしたりする工夫が必要である（佐藤 2017）。

(3) 板書による方法

大塚（2010）によると、板書は、「書くことで定着」「集中できる」というプラスの面に加え、板書は、学生にとって「スピードがちょうどいい」「ノートが書きやすい」というアンケート結果が示されている。しかし、授業をする側にとって板書は時間がかかり、大量の情報を示すのは難しい。

表1 教科書、配布資料、スライド、板書の特徴

	教科書	配布資料	板書	スライド
体系的な知識を提供できる	○	△	△	×
多くの情報を提供できる	○	○	×	○
授業前に参加学生に合わせ内容を変更できる	×	△	○	△
授業中に内容を柔軟に変更できる	×	×	○	△
図や文字をキレイに示すことができる	○	△	×	○
動画、写真などを提供できる	×	×	×	○
学生の費用負担が少ない	×	○	○	○

○・・・適している △・・・あまり適さない ×・・・適さない

佐藤（2017）を参考に筆者が作成

(4) スライドによる方法

対面、オンライン授業問わず用いられることが多いパワーポイントによるスライドは、「図表が分かりやすい」「まとまっている」「知識が深まる」というプラスの意見と、「画面の切り替わりについていけない（書いている途中で画面が替わる）」「どこが大切か不明」というマイナス面が、アンケート結果に示されている。（大塚 2010）

講義法による授業では、口頭で情報を伝達する際に、パワーポイントなどを用いて作成されたスライドを併用することが一般的となっている（佐藤 2017）。口頭の説明だけでは伝わりにくい内容を、要約、箇条書き、図、写真など視覚的に見せることで、理解と知識の定着を促す役目がある。逆に、文字情報をスライドに詰め込みすぎると、スライドを見たときに、重要箇所とそうでない箇所の区別がつきにくく理解しにくい。

スライドによる授業は、ただスライドを読むだけの講演型になりやすく、眠気に襲われることやモチベーションの低下を招くことが多い（宇野ほか 2016）。これらのことから、スライドを使用する場合は、教員が画面の切り替わりを意識する、大切な部分を強調することが必要である。授業において伝えたいことを学生に強く印象付けるためには、板書とスライドを併用すること、スライドのデザインを分かりやすくする工夫が求められる。

近年ではスマートフォン、パソコンの高性能化など ICT 機器の進化、動画サイトの充実により、写真や動画などを載せた、プレゼン資料、授業資料を作る機会も増えている。知識の定着を図るためには、パワーポイントなどを使用したプレゼンスライドが欠かせない。コロナ禍以降需要が増えたオンライン授業や、リアルとオンラインのハイブリッド型授業では、プレゼンスライドが大いに役立つ。プレゼンスライドがあることで、配布資料にもなるため授業の復習にも活用できることから、教員と学生双方にスライドを作成するメリットはあると考える。

教科書は、体系的な知識や情報を提供するのに向いているが急な変更対応は難しい。配布資料は、

教科書やスライドの補足資料として役立つが、印刷後に変更できない。板書は、その場に応じて柔軟に対応できるが、大量の情報を提供しにくい。スライドは、動画、写真などと併用できるが、体系的な知識を提供するのには向いていないというメリット、デメリットがあげられる。

近年、「一方的」で「受動的」な学びをもたらす講義法に代わる教育方法として、アクティブラーニングが注目されている（佐藤 2017）。アクティブラーニングによる授業で板書は、学生の発言をできるだけ多く記録することで、学生は議論の過程を理解し、考えてから発言ようになる（中井 2015）。黒板やホワイトボードに板書した内容は残しておくため、授業中に何度も確認することが可能となるため、記憶に定着するのに役立つ。「双方向の講義」「書く、話す」「ディスカッション」「協働学習³⁾」「探求型学習⁴⁾」など、教授する側がスライドを使いながら、アクティブラーニング形式の授業（中井 2015）を取り入れることも可能である。

3. 目的に合わせたスライドのルールとは

大学授業の際に使用するスライドを「授業」、顧客に説明したり提案したりするスライドを「ビジネス」、社内で経営者に決済を仰ぐためのスライドを「プレゼン」と定義し、表 2 のように、授業、ビジネス、プレゼンの 3 つの観点で整理を行った。ビジネスや教育、研究の場面では、何の工夫もなしに資料が作られることが少なくない。例えば読みにくいフォントを使用する、目的無く何もかも強調する、装飾しすぎるなど自己流の資料は、読み手や受け手に負担を与えている（高橋ほか 2021）。一方、情報を認識するのに要する時間が短いスライドは、聴衆が「わかりやすい」と感じる可能性が高くなる（宮野 2013）。伝わるデザインにはルールがある（高橋ほか 2021）というように、一定のルールに従って受け手の負担を減らしていくことが基本である。

パワーポイントを使用したスライドを使う機会は、学校での授業だけではなく、研究者や大学院生などの学会発表、ビジネス現場では顧客への提案活動、企画説明資料、会議などで合意を目指すプレゼン資料などがある。知識の定着を促すのか、行動を起こさせるのか、相手の理解を得るのかなど、プレゼンライドの目的、用途によって、構成が全く変わってくるのが分かった。

ビジネス向けプレゼンとして作成する場合は、文字サイズも大きく、目立つフォントの使用を強調しグラフと文字の配置、及びグラフの色など、短時間で相手に理解させる工夫が必要である。

ビジネス向け提案、企画書として使用する場合は、金融業界や公共団体などのフォーマルな印象が好まれる場合では文字色は黒、柔らかい印象を残したいのであれば文字色はグレー、フォントは MS P ゴシックなどと、相手に与える印象と内容の両方を重視している。相手を動かす必要だけではなく、内容の充実度も大切である。

大学の授業に向けた書籍では、文字のフォント、文字の色、背景色、レイアウト、図の使い方について記述していた。ビジネスのように視覚に訴えかけるインパクトは重要ではないが、文章を理解させるために、文章の読みやすさ、改行の位置、文章を揃える位置などに気を配る必要がある。あまりにもスライドの情報量が多いと、ただ、文章を読み上げるだけの授業になってしまい、重要なポイントが分からなくなってしまう。スライドの良さを生かすのであれば、情報量は減らし図や

表2 パワーポイントの授業向け、ビジネス向けの違い

項目	授業	ビジネス	プレゼン
特徴	ポイントスライド	ロジカルスライド	インパクトスライド
目的	知識の定着を促す	行動を起こさせる	相手の理解、納得を得る
用途	授業スライド	説明資料、提案資料	プレゼン資料
構成	説明内容の要約を箇条書きで示す	判断材料や具体性を示す	課題＋解決策、結論＋根拠などを示す
時間	90分	状況による	3～5分
書体	ゴシック体が基本 (メイリオ等含む)	MS P ゴシック	HGP 創英角ゴシック UB MS P ゴシック (キーメッセージ以外)
文字サイズ	24ポイント以上	36ポイント (タイトル) 28ポイント (小見出し) 20ポイント (本文)	70～100ポイント (キーメッセージ) 50ポイント (本文強調文字)
文字色	基本は黒 (あるいは灰色)	基本は黒 (フォーマル) 濃いグレー (ソフト印象)	黒 (本文中の事例)
背景色	基本は白	必ず白色	白 (本文中の事例)
文字量	多い	多い	少ない
色	合計4色まで (背景色、文字の基本色、メインの色、強調の色)	4色まで (メインで使う色とアクセント色は色相環の反対側色)	3色まで ポジティブ文言は青色 ネガティブ文言は赤色
文字列	違和感のない位置で改行	1文40文字以内	キーメッセージ13文字以内
レイアウト	左から右、右回り (時計回り) で構成	左から右、上から下、Z型で構成	左から右、Z型で構成
図形	角を丸めすぎない 矢印は目立たせない 複雑なオブジェクトは避ける (ブロック矢印など)	四角形 (具体的なもの) 楕円系 (抽象的なもの) 矢印はグレー・カギ線矢印、三角矢印を使う	三角矢印で全体の流れを示す
図やグラフの色	図に彩度の高い標準色を使わない。中に色があるときは、枠線は使わない	図に原色を使わない	円グラフを使う場合は単色、強調部分のみカラー
表・グラフ	数値は右揃え、単語は左揃え。背景に色を付ける	円グラフを使わない グラフは色と矢印で強調	グラフは左、文字は右 グラフの文字を減らす

佐藤 (2017)、高橋ほか (2021)、前田 (2022)、松上 (2019)、宮野 (2013) をもとに筆者が作成

写真を多用し、視覚的に訴えることで、学生への理解を促すことができるのではないだろうか。

おわりに

本稿では、FD のいきさつから、現在の大学で実施されている FD の状況、プレゼンスライドがどれだけ、分かりやすさ、分かりにくさに影響しているかを先行研究から読み解いた。次に、講義法授業の教材である、「教科書」「配布資料」「板書」「スライド」のプラス面とマイナス面をまとめた。最後に、市販されている書籍を分析し、大学教員向けのスライド、企画提案するための説明を基本としたビジネス向けスライド、相手と合意形成を図るためのスライドの 3 つの違いを比較した。対象が異なっていたとしても「背景の色」「文字色」「テーマ」「図の使い方」などのデザインの基本は共通しているため、大学の授業で使うスライド、ビジネスで使うスライドは、どの書籍を参考にしても役立つそうだが、スライドの構成やメインで伝えたい部分が大きく異なっていた。

各大学で、FD への取り組みは進んでいるが、アンケート調査が改善のベースとなっており、教職員の資質向上等の取り組み状況は、進んでいるとは言えない状況だった。山下ほか (2010) にあるように、知識の定着がしやすく、見て分かりやすいシンプルなスライドは、理解を深める可能性が高いため、大学教員がスライドの向上を図ることは、授業の質を高める 1 つになる。多くの大学教員が、授業用のスライドに目を向けてもらえることを期待したい。本論文においてはプレゼンのスライドに焦点を絞って整理を行ったが、専攻によって差異はあるのだろうか。今後は教員や学生へのインタビュー調査を実施した上で比較検討する必要があるだろう。スライドの重要性に気がつき学生の満足度が高まれば、教え方などスライド以外の部分に目が向く人が増え、さらに授業の質が高まるのではないだろうか。

〔注〕

¹⁾中央教育審議会「制度部会（第 21 回）配付資料 5-1」（2006）「大学教員のファカルティディベロップメントについて」によると、「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称。具体的な例としては、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催などを挙げることができる。」と説明されている

²⁾ 教員による一方向的な講義形式ではなく、能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法

³⁾ 学生同士が教え合って学び合う協働的な学び

⁴⁾ 学生自身が自分で問題を設定し、その問題を解決するために情報を収集、整理、分析すること

〔文献〕

大塚真理子 (2010) 小学校教員養成科目 家庭科における授業改善の一考察 ―板書とパワーポイントによる授業形態の比較を通して―, 佛教大学教育学部論集, 21

- 宇野健, 川本紗知 (2016) 学生の授業参加促進を目的としたプレゼンテーション型授業支援システムの開発, 県立広島大学経営情報学部論集, 9, pp107-113
- 駒澤大学 (2023) 令和4年度FD活動報告書 <https://www.komazawa-u.ac.jp/about/files/FDreport2022.pdf> (参照日 2023.11.15)
- 佐藤浩章 (2023) 『大学教員の能力開発研究』玉川大学出版部
- 佐藤浩章 (2017) 『大学の教授法2 講義法』玉川大学出版部
- 佐藤浩章, 栗田佳代子 (2021) 『大学の教授法6 授業改善』玉川大学出版部
- 大同大学 (2022) 2022年度大同大学教育開発・学習支援センター活動年報 https://www.daido-it.ac.jp/document/outline/class_evaluation_system/2022_annual_report.pdf (参照日 2023.12.03)
- 高橋佐磨, 片山なつ (2021) 『伝わるデザインの基本 増補改訂3版 よい資料を作るためのレイアウトのルール』技術評論社
- 中央教育審議会「制度部会(第21回)配付資料5-1」(2006) https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/003/gijiroku/06102415/004.htm (参照日 2024.1.27)
- 中井俊樹 (2015) 『大学の教授法3 アクティブラーニング』玉川大学出版部
- 夏目達也, 近田政博, 中井俊樹, 齋藤芳子 (2010) 『大学教員準備講座』玉川大学出版部
- 前田謙利 (2022) 『社内プレゼンの資料作成術【完全版】』ダイヤモンド社
- 松上純一郎 (2019) 『PowerPoint 資料作成 プロフェッショナルの大原則』技術評論社
- 宮野公樹 (2013) 『研究発表のためのライドデザイン』講談社
- 文部科学省 (1998) 審議会答申 21世紀の大学像と今後の改革方策について https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/003/gijiroku/attach/1416196.htm (参照日 2024.1.27)
- 文部科学省 (2000) 大学における学生生活の充実方策について (報告) 一学生の立場に立った大学づくりを目指して一 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm (参照日 2023.12.01)
- 文部科学省 (2009年以前) Q1 大学のカリキュラムなどの教育内容はどのような考え方で決められるのですか。また、教育内容の改革として、具体的にどのような取組が進んでいるのですか https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/001.htm (参照日 2023.10.30)
- 文部科学省 (2023) 大学における教育内容等の改革状況について (令和3年度) https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1417336_00010.htm (参照日 2023.11.27)
- 文部科学省 (2023) 令和3年度の大学における教育内容等の改革状況について (概要) https://www.mext.go.jp/content/20230908-mxt_daigakuc01-000031526_1.pdf (参照 2024.1.4)
- 山下祐一郎, 中島平 (2010) プレゼンテーションスキルと分かりやすさの関係分析ーレスポンスアライザによる評価とアンケート分析の比較ー, 日本教育工学会論文誌, 34, pp5-8